〔生化学　第80巻　第6号，p. 475，2008〕

アトモスフィア

# JBの最近の動向について

宮　園　浩　平*

私は学生の時に，当時の東大医学部第一生化学の山川民夫教授の教室では全ての論文をJBに発表しておられると聞いた．我が国の研究レベルを向上させるためにも海外の雑誌ではなく国内の英文雑誌のレベルを上げることが重要だと言われたことを記憶している．私が留学時に所属していたSwedenの大学の研究所ではJBを定期購読していて，糖鎖関連の研究や江橋節郎先生のグループの仕事など日本の優れた研究が掲載されていると当時の同僚から言われたのを記憶している．私は現在，JBのeditorの一人として編集に関わっているが，こうした先輩方の努力を考えると今後JBをさらに発展させるためにはどうしたらよいか，もう少し真剣に考えなければいけないと自省している．

Impact factor（以下，IF）の功罪はしばしば話題となっているが，業績評価のさいにIFを目安とする場合が少なくないのでどうしても気になってしまう．2006年のJBのIFは1.963で，ここ数年は2点前後を推移している．ちなみにJBCやMCBなど生化学・分子生物学分野で一流と言われる雑誌でも多くはかろうじて5〜6点台を維持しているのが現状である．私はJBCには2006年からeditorial board member（EBM）として関わっているが，JBCは生化学・分子生物学の分野の優れた論文を掲載するという独自の立場を大切にし，IFを意識的に上昇させる努力はほとんどして来なかったようである．EBM会議でIFの話題がでても，IFには惑わされるべきではないという考えのメンバーが多いようである．JBCは最近，タンパク質同士の結合をendogenousに確認していないものは採用しない，遺伝子のクローニングは機能を明らかにしないものは採用しないなどのいくつかのeditorial policyを明確にした（http://www.jbc.org/misc/edpolicy.shtml）．JBCの強みは長い歴史に支えられて独自の立場を維持していることであり，このあたりはJBにも学ぶべき点があるように思う．またJBCのEBMを見ると日本だけでなく中国など，アジアのメンバーが急速に増えて来たことはJBCの世界戦略とも考えられ，JBがどのような立場を取るかも今後重要な問題となって来よう．

一方で，IFが高くなればそれなりの効果もみられるのが現実である．我が国の雑誌ではInternational ImmunologyのIF 4.0を筆頭に，Cancer Scienceが3.8，Genes to Cellsが3.5である．Cancer Scienceはつい数年前まではIF 2点前後でJBとあまりかわらなかったが，2004年以降飛躍的にIFが上昇した．その秘訣はまず，Japanese Journal of Cancer ResearchからCancer Scienceへ名称を変更したこと，日本癌学会の会員を中心に総説を数多く集めるなど様々な形で会員の協力を集めたことに尽きよう．その結果，一気にIFが上昇した．いったんIFが上昇すると今度は世界中からどんどん論文が投稿されるようになり，雑誌の評判も上昇するという好循環となっている．会員の中には忙しくなったとの不満も多いが，雑誌の地位が上昇したのは事実である．

JBの編集に関わっている立場としてはJBに掲載されている論文の質は高く，国内の他の雑誌に決して遅れを取るものではない．最近でもJB論文賞の選考について改善がはかられるなどの努力が行なわれている．しかしもう一歩，踏み込んだ改善策が必要であろう．JBの編集会議でも話題となっているが，IFはともかくとして，JBを魅力のある雑誌としてさらに発展させていくためにも学会をあげた支援が必要な時期に来ていると思われる．

*東京大学大学院医学系研究科